

# 面倒見させて

～ 家政婦のおばさま・下の世話まで ～

櫻木 充

## 【1】思春期のプライベート

「さてと、そろそろ出ないと」

梅雨入りを間近に控えた土曜日、昼下がりのこと。

ダイニングのパソコンで「今夜のレシピ」と名づけられたサイトを閲覧していた田辺涼子は、そろそろ二時を指そうとしている壁掛け時計を一瞥し、おもむろに椅子から腰をあげた。

一旦私室に立ち戻り、手早くメイクを施す。セミロングの髪を適当にアップで束ね、カジュアルな装いのまま自宅マンションを後にする。

これから涼子が向かう先は車で十五分ほどの場所にある北岡邸だ。

涼子は昨年四月から家政婦として北岡家で働いている。

主な仕事はプライベートルームを除いた部屋の掃除と洗濯、ひとり息子のための食事の支度で、実働時間はおおよそ三時間ほど。普段は午後三時に訪問していた。

とはいえ、勤務時間が決められているわけではない。そもそも北岡家とは仕事に関して契約の類を交わしているわけでもなかった。なにせ涼子が家政婦として勤めることになったのは、あくまで北岡家の夫人、美有紀からの個人的な依頼によるものなのだから。

美有紀とは高校二年生からの友人で、かれこれ二十五年あまりの付き合いになる。

一昨年の冬に脳溢血で夫を喪ってから、北岡家の家計は美有紀が支えており、仕事が多忙を極めるようになったことが家政婦を頼んだ理由になっていた。

美有紀は現在フリーのアナウンサーとして芸能活動をしている。結婚前はテレビ局のアナウンサー、いわゆる「局アナ」の職に就いていたため、現場復帰を果たしたと言ってもいいだろう。

同局のプロデューサーを務めていた亡夫とは二十六歳の時に結婚し、すでに妊娠していたことから「寿退社」を選んだ。

大学時代にミスコンで優勝経験を持ち、その美貌から当時の美有紀は若手女子アナでナンバーワンの人気だったのだが、本人はそれほどアナウンサーという職業に未練はなかったようだ。古株の女子アナから陰湿な嫌がらせを受けたり、社内の派閥争いに嫌気が差していたことも退職を選んだ一因になったらしい。

結婚後は専業主婦として暮らしていた美有紀にとっては十五年ぶりの現場復帰になったのだが、亡夫のコネクションを頼って芸能プロダクションとマネジメント契約を結び、仕事は思いのほか順調だった。

若かりし頃より若干ふっくらした感はあるものの、美有紀の美貌は今も衰えておらず、むしろ局アナ時代より視聴者の受けもいいらしい。

復帰してしばらくは母親業もこなしていたのだが、バラエティ番組のパーソナリティに抜擢されてからは家事と仕事の両立がどうしても困難になり、家族ぐるみの付き合いをしていた親友に助けを求めたという次第である。

報酬は月に十五万円也。昨年ひとり娘が大学に進学し、独り暮らしをはじめようになってから夫の給料だけでは少々家計が厳しくなり、パートに出ようと考えていた涼子にとっても有り難い話だった。

美有紀は土日と祝日を完全休業にしており、涼子が家を訪れるのは平日に限られているのだが、今週末は特番の取材でどうしても地方に出張しなければならないと聞いていたため、気を利かせて「休日出勤」することにしたのだ。

しかし、今日の目的は家事ではなかった。

実のところ家政婦としての仕事以外にも、美有紀からひとつ頼まれていることがあったのだ。

息子の私生活にそれとなく気を配ってもらえないか、と……。

この春私立学園に進学した耕介は今、一番難しい年頃だ。

美有紀から聞いたところによると最近成績の低下が著しく、先に行われた中間テストの結果は平均点以下だったらしい。入学当初はトップクラスの好成績だったのだから、僅か二ヶ月あまりで急降下したことになる。

また、私室に籠もっている時間も多くなり、母親とはあまり口も利かないという。

もしかしたら悪い友達と付き合いはじめたのか、学校でイジメでも受けているのかもしれないと、美有紀はかなり不安を募らせている様子だ。

とりあえず自分の目が届く限りでは素行の乱れなど一切窺えない。いつも決まった時間に帰宅しているし、自分と接する態度も以前と変わりなく思えたため、美有紀には「心配する必要はない」と言っているが、その一方では疑いもあった。

耕介は何か悩みを抱えているのではあるまいか、と……。

キッチンで食事の支度をしている自分をカウンター越しに眺めながら、ときどき切なげな溜め息を吐く、そんな耕介の姿に何度か気づいたことがある。

以前に一度「どうしたの？」と声を掛けたことがあるのだが、耕介は慌てがちに首を横に振り、逃げるようにダイニングを立ち去った。あのときの様子からして、耕介はたぶん自分に悩みを打ち明けようかどうか迷っていたに違いない。

自分にとっても耕介は親類のようなもの。幼い頃から成長を見届けていることもあって、甥のような感覚で捉えていた。

耕介も自分のことを慕ってくれている。中学一年の頃、母親と喧嘩して家を飛び出してきたときにも自分を頼ってきた。母親には相談できない悩みも「涼子おばさん」になら打ち明けてくれるのではないだろうか。

いつもは旦那の食事の支度をしなければならないため、夕食を作ってすぐに引き上げてしまい、耕介の悩みに耳を傾けている暇もないのだが、今日ならゆっくり時間が取れる。夫は会社の慰安旅行で出掛けており、今夜は温泉宿に泊まる予定になっているため、たまには耕介と一緒に夕食でも食べようかと考えてもいた。

（どうやら、居るみたいね）

途中のスーパーマーケットで夕食用の食材を買い、北岡邸を訪れた涼子はいつものようにガレージ前に車を横付けすると、門扉の脇に駐められた耕介の自転車を横目にして玄関に足を向けた。

それほど深刻に考える必要はないと思ってはいるが、もし美有紀が危惧している通り学校でイジメでも受けているとしたなら、できる限り早めに対策を取らなければならない。

思春期の年頃は精神的にも不安定で、何をしでかすか分からない怖さもあった。

耕介に限ってあり得ないとは思うが、「イジメを苦にして自殺」、そんな報道を耳にするたび一抹の不安に駆られていることも事実である。

どちらにせよ、何か事件が起きてからでは手遅れになってしまう。

涼子は合い鍵で玄関の扉を開けて食材をダイニングに運ぶと、すぐ二階の子供部屋に足を向けた。

（とは言っても、何を聞けばいいのかしらね）

痛くもない腹を探るような真似もできない。とりあえず成績が落ち込んでいる原因でも尋ねてみようか、それとも、さりげなく学校生活の話題でも振ってみようかと思いを巡らせながら階段を上がってゆく。

が、二階の踊り場まで来たときのこと。

何やら苦しげな耕介の喘ぎ声を耳に留める。

（……何かしら？ 耕ちゃん、どうしたのかしら）

もしかしたら具合が悪くなり、部屋で寝込んでいるのかもしれない。涼子は心配げな面持ちで部屋の前に歩を進めると、扉を二度ノックして耕介に声を掛けた。

「耕ちゃん、どうしたの？」

「……………」

「ねえ、耕ちゃん、大丈夫？」

あらためて扉をノックするも、いつまで経っても返事はない。

室内からはせわしげな息づかいとともに、苦しげな呻き声が聞こえてくる。

涼子は不安に駆られるまま扉を開き、隙間から顔を覗かせるようにして中の様子を窺うのだが……。

「……なっ!？」

やにわに瞳に飛び込んできた光景に、涼子は愕然とした。

ボトムレスの姿で左手のベッドに座り、枕元に置かれたノートパソコンの画面に見入りながら、耕介が剥き出しの男性自身を握っていたのだから。

(やっ、やだ……耕ちゃん、マスターベーションしてたのね)

年頃の息子を持った母親ならば、雰囲気からそれとなく察していただろうが、涼子にとっては予想外の出来事である。

今日は土曜日のため自分が来るとは思っていなかったのだろう。

ヘッドフォンで耳が塞がれており、こちらの声にも気づかなかっただろう。

しかし、驚きはそればかりではなかった。

耕介が食い入るように見つめているパソコン画面に目を遣った涼子は、にわかに頭を混乱させた。いったいいつ撮影されたものなのか、自分の姿を捉えたビデオが映し出されていたのだから。

ディスプレイには二つのビデオ画面が開かれており、一方はキッチンで食事の支度をしている姿をカウンター越しに撮影したもの。もう一方はパンツに包まれた尻や胸元のアップがエンドレスで再生されていた。

(いったい、どういうこと？ どうして私のビデオを観ながらオナニーを?)

虚ろな視線を宙に彷徨わせ、あれこれ思いを巡らせる涼子。

しかし、この場で考えている暇はなかった。

間もなくして耕介に絶頂のときが訪れる。涼子さん、涼子さんと、謔言のように自分の名を呟きながら全身をわなわなと痙攣させる。

(……あっ、いけない、見つかったわ)

どうやら射精を終えたのか、傍らに準備していたティッシュで亀頭をくるみ、満足気な溜め息を吐いた耕介にはっと我を取り戻すと、涼子は音を立てぬように注意しながら静かに扉を閉めた。

そのまま後ずさりするように廊下を引き返し、足音を忍ばせて階段を降りてゆく。

「ふう、とんでもないところを見ちゃったわ」

一階のダイニングに戻った涼子は、心を落ち着けるように大きく深呼吸をして食卓の椅子に腰を下ろした。

べつに狼狽えるほどのことではない。年頃の男子なら誰でもマスターベーションくらいするはずだ。健全と言えるかどうかは分からないが、取り立てて問題視する必要はないと自らを言い聞かせる。

それはいいのだが……。

耕介はいったい何故、自分のビデオを観ながら自慰に耽っていたのか、その点が気に掛かる。

もちろん、導かれる答えはひとつしかなかった。

(つまり、耕ちゃんは私で……私のことを考えて、マスターベーションを?)

どのような妄想に溺れていたのか知る由もないが、俗な言葉を用いるなら、自分は耕介の「オナペット」ということか。

「ま、まさかよねえ。私みたいなおばさんを、お、オナ……オナペットにするなんて、いくら何でも考えられないわ」

苦笑混じりに言葉を吐き捨てて、大袈裟に肩をすくめる。

と、そのときのこと。

階段を降りてくる足音に気づき、涼子は咄嗟に椅子から腰を上げた。小走りにキッチンに足を向け、その場を取り繕うように買ってきた食材を冷蔵庫に収める。

「……あっ!? りょ、涼子おばさん？」

「あら、耕ちゃん、家に居たのね。勝手にあがってごめんなさい」

肩越しに耕介を振り返ると、涼子は何事もなかったかのような態度で声を掛けた。

「べつに構いませんけど、どうしたんですか？ 今日土曜日ですよ」

「ええ、お母さんが明日まで仕事で出張でしょう？ だから、食事の支度をしてあげようかと思ったんだけど……」

「そうだったんですか。でも、一日くらい平気ですよ。何か適当に食べますから」

自分も多少は料理ができるようになったからと、耕介は人懐っこそうな笑みを浮かべて小さく肩をすくめた。

「あら、そう言ってもらえると助かるわ。勝手に来ておいて何だけど、さっきね、うちの旦那から電話があって、急に帰らなければいけなくなったの」

涼子は思いついたまま耕介に言った。べつに身の危険を感じているわけではないが、あのような現場を目撃した後では、耕介と二人きりで家に居づらかった。

「何かあったんですか？」

「ううん、たいしたことじゃないんだけど、ごめんなさいね。とりあえず食材は買っておいたから……あっ、そうそう、これを参考にして、耕ちゃんが自分で作ってみて」

手を切らないように気をつけてと、そんな注意を足してパソコンからプリントアウトしたレシピをカウンターに載せると、涼子は耕介の脇をすり抜けるようにして、小走りに玄関に足を向けた。

瞬間、少年の体からふんわりと漂ってきた媚臭……。

それは、ほのかな汗臭さと儚げな精の香りが混じり合った、女体の疼きを誘う魔惑のフレグランスだった。

## 【2】熟れた女体

(……まさか、耕ちゃんが私を想って、マスターベーションをしていたなんて)

逃げるように北岡邸を立ち去り、自宅マンションに戻った涼子は、ダイニングのソファにぐったりと腰を下ろし、あらためて先の出来事を思い返していた。

いまだに現実が受け止められない気分だ。

よもや耕介が自分をオナペットにしていようとは……。

「きっと、ちょっとした気の迷いよ。私なんてもう四十過ぎのおばさんだもの」

と、自らを納得させようとはしたものの、涼子はすぐに頭を振った。

だとしたら、わざわざ隠し撮りなどするわけがない、一時の気の迷いで「オカズ」のビデオなど作るわけがない、と……。

もしかしたら耕介が抱えている悩みは自分に対する想いなのではあるまいかと、涼子はふと考えた。

たびたび物言いたげな眼差しを向けていたのも、切なげな溜め息も、それが理由だったのではないだろうか。簡単な食事くらい作れるようになりたいと、ときどき耕介が料理の手ほどきを願うようになったのも、憧れのおばさまとのスキンシップを欲してのことだったのかも分からない。

「もしかして、私が何かしたのかしら？」

耕介を悩ませてしまった原因は自分の側にあるのかもしれないと、涼子は自らの行いを顧みた。

もちろん身に覚えがあるわけもないが、思春期の少年はとかく性的刺激に敏感なものだ。たとえば豊かな胸の膨らみや、女らしいヒップラインを見ているだけでムラムラしてしまう可能性も充分にある。

「……でもねえ、私のどこがいいのかしら？」

呆れがちに溜め息を吐き、ぼんやりと宙を見上げる涼子。

耕介が何を妄想して自慰に耽っていたのかは知れないが、母親と同じ年齢の女性に好奇心を抱くのは少々異常ではないかと、そんな気もしている。

だからといって、涼子は決して自らの容姿を卑下しているわけではなかった。

確かに二十代の頃と比べれば体の厚みは増してしまったし、肉体的の衰えも実感しているが、まだまだ女としての魅力も十二分に備えているはずだと、多少の自信は持っている。



たいてい実年齢より五歳以上は若く見られるし、それほど体型が崩れているわけでもない。さすがに堂々と全裸を晒す勇氣はないが、バストは九十センチを優に上回るFカップ、ウエストもしっかり括れているし、ヒップも女性らしい丸みを描いている。

たとえばファウンデーション系の下着で体のラインを整えれば、ボディコンシャスなドレスでも着こなせる自信もあった。

人妻や熟女がもてはやされる今の時世にあって、三十代後半から四十代前半の年齢はまさしく女盛りと言ってもいい。それは大人の世界に限った話ではなく、俗世間に感化されやすい少年にとっても完熟期に達した女性が魅力的に思える、そのような時代なのかも知れない。

実際、美有紀は十代後半から二十歳前半の若者にもかなり人気があるらしいのだ。最近売り出し中の少年アイドルから「ファンです」と言われ、ツーショット写真をせがまれてしまったと、そんな話を自慢げに聞かされたことを覚えている。

「まあ、そりゃあね、美有紀ほど美人じゃないのは分かっているけど、でも、私だって捨てたものじゃないわ……それに、耕ちゃんくらいの年頃の男の子は、大人の女性に憧れるものだし、もしかしたら、私みたいな女が好みのタイプかもしれないし」

ぶつぶつと独り言を呟きながら、耕介の内面に思いを馳せる涼子。

異性に対する少年期の憧れは純粋な想いばかりではないはずだ。もっとも性欲過多な年頃でもあるのだから、憧れの女性をオナペットにするのは自然なこと。

確かに戸惑いはある。受け入れがたい思いもあるにはあるが、しかし、嫌悪と呼べる感情は一切抱かなかった。それだけ魅力的な女性として捉えられているとしたら、むしろ誇らしいことではないか。

相手が耕介となれば、なおさらに喜ばしい。

さすがに性的欲望を芽生えさせたことはないが、少なからず耕介にはひとりの男として好感を抱いていた。

両親の美点を受け継いだ耕介はなかなかの美少年で、事務所の力によって作り上げられた出来損ないの少年アイドルよりずっと好ましく感じられる。

青年期に足を踏み入れようとしている近頃では男らしさも出てきて、ますます魅力的になったと、そんな気もしている。

「耕ちゃんなら学校でもきっともてるんじゃないかしら。彼女なんていくらでも作れそうなのに、どうして私なのかしらね……フッフ、やっぱり少し変わっているわ。小さい頃から身近にいるおばさんを、オナペットにするなんて」

耕介は果たして何を妄想して精を放ったのだろうか、涼子は自慰の現場を脳裏に蘇らせながら、ふらふらと寝室に歩いていった。

（やっぱり下着姿とか、裸を妄想していたのかしら？）

クロゼットの扉に嵌め込まれた姿見の前に立ち、おもむろにカットソーを脱ぎ去る。ベージュ色のコットンパンツを降ろし、下着姿を鏡に映す。

「何だか、冴えないわね」

いかにも主婦然とした下着の装いに、涼子は不満げに鼻を鳴らした。

機能性のみを追求したフルカップのブラジャーはスポーツ用に似たシンプルな品。カップにはフェミニンな飾りも一切無く、ランジェリーと呼ぶには程遠い。

ガードル風の深穿きショーツも年増女御用達の一枚だ。

自分と違って美有紀は下着にもきっちり金を掛けている。

ガードルや補整系の下着でも豪華でフェミニンなものばかりだ。

母の下着を目にする機会もある耕介はきっと、洒落たランジェリーに飾られたおばさまの姿を妄想しているに違いない。このような年増臭い下着では、失望させてしまうかもしれないが……。

「でも、耕ちゃんが一番見たいモノは、おばさんの……裸、かしら？」

ぼんやりと鏡を見つめながら、虚空の中にいる耕介に甘く問い掛ける。

もちろん裸体を拝むばかりで少年の淫夢が終わるわけがない。身勝手な夢の世界で、耕介はきっと憧れのおばさまから淫らな性の施しを受けていたに違いない。

「手とか、口で、してもらうとか？ それとも、セックスの……お、オマンコの、手ほどこかしら」

卑猥な台詞を口にして、破廉恥な妄想をエスカレートさせてゆく。

肩口からチラリと覗けただけだが、耕介のモノはなかなか立派なサイズ。

間違いなく夫のそれより逞しく、若さに溢れた勃起具合だった。

耕介はきっと妄想の世界で憧れのおばさまに、女体の中心部めがけて極太の若勃起を何度も何度もぶちこんでいたに違いない。子宮をも貫くほどに深く太マラを突入させ、ガムシャラに腰を振っていたに決まっている。

「それとも、私に腰を振らせていたのかしら？　そうよ、私をエッチで淫乱なおばさんにして、逆レイプされるみたいに騎乗位で……初めてのオチンチンを、私のオマンコで、一杯一杯しゃぶってもらっていたのかもしれない」

涼子は独り言を呟きながら、淫夢に溺れていった。ブラジャーの上から乳房を揉みしだき、モジモジと太腿を擦り合わせて女体を昂ぶらせてゆく。

「はぁ、はぁ……あ、あああ……そ、そうよ、こんな風に、腰を動かして……うっ、んんう、お、オマンコで……グチュグチュに濡れたおばさんマンコで、オチンチンをおおう……ほら、ほらっ、ほらほらっ、ほらあああ……」

淫らな妄想をエスカレートさせ、火照った股座に手のひらを這わせる。

これほど淫らな気分になったのは久しぶりのこと。

夫とはかれこれ五年以上もセックスレスで、性的な行為からはずいぶん遠ざかっていた。だからといって浮気に走ろうと思ったことはない。セックスの悦びは十二分に知っているつもりだが、夫を裏切るような真似をしてまで慰めを必要とはしていない。実際これまでは、それほど性欲に悩まされることもなかった。

しかし、耕介の自慰に当てつけられ、思春期の少年が漂わせていた牡の香りに触発された女体は今、どうしようもないほどに盛っている。自慰する習慣などなかったのだが、もはや自らの手で慰める以外に体の疼きを鎮める術はない。

涼子はそそくさとブラジャーを外し、ショーツを脱ぎ去ると、一糸纏わぬ姿になってベッドに身を横たえた。

淫夢の舞台に耕介を登場させ、女体を好きに弄ばせている場面を演じつつ、両手で荒々しく乳房を揉む。硬くしこった乳首を摘み、右に左に転がしながら耕介に台詞を与える。

涼子おばさんのアソコが見たい、と……。

「もう、耕ちゃんったらエッチな子ね。おばさんのアソコが……オマンコが見たいなんて、本当にスケベな子」

メツと顔を顰めて、幼子をあやすように甘く呟くと、涼子はじわじわと股を広げ、Mの字面を描くように両脚を開帳させた。

「でも、いいわ。耕ちゃんなら、うん、特別におばさんの一番いやらしい部分、オマンコを、隅々まで見せてあげるから」

自然のままに生えたヘア、使い古された女陰を目にして耕介はどのような感想を抱くだろうか。女の性器などグロテスクなだけ、美しいと思ったことは一度もないが、それでも、できるなら言ってもらいたい。愛らしい声で「綺麗だ」と……。

「んフフ、そうなの。本当に？ おばさんのオマンコ、そんなに綺麗なんだ？ うん、なあに。もっと奥まで見たい？ フフフ、いいわよ、見せてあげる。こうやってオマンコのビラビラを……ほら、ほらっ、いっぱい広げてあげるから、見えるでしょう、奥まで……おばさんのオマンコを、奥の奥まで観察してえ」

涼子はひとり芝居を演じつつ、右手を下腹部に伸ばしていった。

恥丘の膨らみを撫でつけるようにして陰部に指を這わせる。

V字を象った二本の指先でラビアを捲り広げ、牝の亀裂を満開にして、複雑に入り組んだ粘膜をあからさまにする。

と、次の瞬間のこと。

割れ目に溜まっていた粘液がドロリと、大粒の雫となって流れ落ちる。

(……えっ!? あっ……あああ、いやぁん、凄いい……こんなに濡れてるなんて)

もともと潤いに乏しい体質で、クニリングスをしてもらわなければ挿入さえ辛かったはずの自分が、これほどまでに花芯を蕩けさせている現実には戸惑いを覚える。

膣口は男を欲するように小刻みに収縮し、尻の穴まで伝うほどの淫水を次々に溢れ出させているではないか。

しかし、驚きはそればかりではなかった。

涼子本人さえ戸惑うほどに女体は敏感で、性的感度も異様に高まっていたのだから。

「ええ、もちろんよ……いいわよ、おばさんのオマンコに触っても」

無邪気な少年の指で性器を弄られている、そんな場面をイメージして包皮の上から優しくクリトリスをさする。

「はあっ……んうう、ふっ、ふっ……ううあぁん……」

やにわに電気ショックを受けたように腰を跳ね上げる涼子。

膣口に指先を滑り込ませてみれば、背筋が仰け反るほどの愉悦にめくるめき、小水をチビりそうになってしまう。

今ここで極太の肉竿を突き込まれたら、もしも若さ漲る男根で膣をうがたれたなら、たった一撃でオルガスムスに達してしまうかもしれない、そう思えるほどに花芯は過敏になっていた。

裏を返せばそれほどまでに交尾を欲しているということだ。

「そ、そうよ、そこ……そこの穴よ、オマンコの穴にオチンチンを入れてえ……そう、膣っ、膣口よ、膣穴にい、くう、んんっ……お、おお、くる、くるわ、耕ちゃんのおチンチンが入ってくるっ！」

中指と薬指を膣口にあてがい、一気に付け根まで二本指を突き入れる。

肉壁を擦り、淫水が泡立つほどに膣穴を掻き混ぜて、さらなる官能を追い求める。

「ほら、もっと、もっとよ。もっと奥までオマンコに入れて、おばさんマンコを奥の奥まで貫いてええ……おほう！ そ、そっ！ いひい……奥が いいの、奥が気持ちいいから、膣の底を、子宮口を叩くの……おっ、おっ！ あああ、いいい、凄いい、凄いわ、いいの、オマンコ気持ちいいっ！ んんう、あ、あっ！」

耕介のイチモツで子宮までも串刺しにされている、そんな淫夢に溺れながら、涼子は完熟の肉壺を掘りまくった。忘れかけていた女の悦びを思い出して、女盛りの肉体に秘められていた性欲を爆発させて……。

「あっ、あっ、いっ、いっ、くっ……ひ、ひいい、くっ、いくうう……ダメッ、ダメダメダメええ、そんなに激しくされたら、おばさんイッ……く、イッちゃうわ、オマンコイッちゃうう、マンコイッちゃうのお、お、おお……くうう、おお、ほうう、イク、イクッ、イクイク……う、ううう！ ん、んんう、いいいく、イクイク、イグーッ、イグウウ！ いいい、んうぐぐう！」

その後、ベッドのシーツが淫水でグショグショになるほど、数時間も夢中で手淫の悦を貪りつづけた涼子は、いまだに疼きが治まらぬ女体に焦燥感を覚えながら、ふと考えた。

耕介を誘惑したらどうなるだろうか、と……。

「そんなこと、できるわけない……けど、もし耕ちゃんから迫られたら、私……」

あっさり体を開いてしまうかもしれないと、押し倒されたらきっと抗うことができないと、獣のごときファックで耕介に犯されている、そんなシーンを夢想してふたたび秘口に指を突き入れる。

人差し指も追加して三本の指で、白んだ本気汁を溢れさせている肉壺を奥の奥まで掘りまくる。子宮の入り口を叩いてもらいたいと、ポルチオの急所を滅茶苦茶に責められたいと、貪欲な熟女の性を盛らせて……。

しかし、自らの手でいくら慰めても、セックスの快感を知っている女体を満たすことはできなかった。むしろ虚しさばかりが募り、ますます男を渴望してしまう。

もちろん少年との肉体関係が許されるわけがないと分かってはいる。

あまつさえ親友の息子に手を出すなど、断じてあってはならぬことだと。

それでも、禁忌の想いに心悩ませていることが原因で耕介の成績が下がっているとしたならどうだろう。自分が想いを叶えてあげること、少年を苦悩から解放してあげられるとしたなら決して過ちとは言えないはずだと、いつしか身勝手な「免罪符」を心の中に用意する。

そして……。

この日を境にして、涼子は心の片隅で耕介との戯れを期待して家政婦を務めるようになった。パンツからスカートに、少しだけお洒落な装いに仕事着を変えて、魅力的なランジェリーを下に纏って……。

とはいえ、自分から少年を惑わせるような真似などできるわけもなく、耕介も取り立てて何を求めてこようとしなかった。ブラウスから覗く胸の谷間やスカートの興味を惹かれている様子も窺えたが、盗撮を試みようとする気配もなかった。

やはり先日の出来事は一時の気の迷いだったのではあるまいかと、少しばかりの悔しさと失望を感じていた、そんなある日のこと。涼子は決意する。

一度、耕介のプライベートを探ってみようか、と……。